

Padmalesyā

——その語源解釈について——

土 橋 恭 秀

leśyā は耆那經典では pkt. で kiṇha, nila, kāū teū, pamha, sukka の六種に分類され、各々色彩の名称で表わされている。そのうち kāū と pamha を除く四語の語源は明白である。pamhalessā の pamha は、kāū と並んで甚だ不明瞭な語である。というのも、まず、この語の近代語による訳語には、黄色と赤色（又は薔薇色）が存在し、諸学者間で不同である。更に、耆那教のテキストを精査する時、耆那教の伝統自身に混乱が見られることが判明する。歴史的に古い耆那經典に現われる pkt. 語形 pamhalessā（以下 pkt. の表示を略す）は、明らかに黄色であり、後期の註釈者達はこの語に skt. 語形 padmalesyā（以下 skt. の表示を略す。）を充てている。一方、經典より新しい Tattvārthādhigamasūtra（以下 TA と略す）に現われる padmalesyā は赤色に解釈されている¹⁾。かくして、同一語に「黄色」と「赤色」の二様の解釈が施されるという矛盾が明らかになる。この耆那教の伝統自身の矛盾こそが、上述の近代学者達を訳語について混乱せしめた原因に外ならないと考えられる。この矛盾を解明するにあたり、まず疑問が生じるのは、註釈では padma と解された pamhalessā の pamha と TA の padmalesyā の padma が同一語として対応するのか否かという点である。すなわち、歴史的に古い用語である pamha が、それよりも新しい padma の原形であることは疑うべくもないから、この問題は pamha が padma に比定されることの是非を問うことに外ならない。更に、これが誤解に基くと判明するならば、その原因と pamha の正しい比定形が究明されねばならない。本稿では、これらの疑問点について解明を試みたい。

上述の耆那教の伝統的な解釈上の混乱に対する疑念は、古くは J. Charpentier と、最近では耆那教の学僧 Muni Nathmal によつて、既に表明されているが²⁾、

1) TA IV-2, 7, 23. cf. J. Charpentier; The Uttarādhyāyanasūtra（以下 Utt. と略す）Vol. 2 (Upsala 1922) p. 393.

2) J. Charpentier; op. cit. p. 393. Muni Nathmal; pamha yā pamma (Hindi) — 雑誌 Tulsī Prajñā Vol. 2 (Jaina Viśvabhāratī 1975) pp. 105-114 に掲載。

本稿でも彼らの論旨を紹介吟味する所から論を進めたい。

Charpentier³⁾ は、TA で pamha が padma に比定され薔薇色に解されているのを誤りとし、更に pamha が語源的には skt. pakṣman (雄しべ) であることや、Weber が Bhagavatīśūtra に現われる pamha を「試金石上の黄金の軌跡」又は「蓮の雄しべ (padmakesara) のような黄色」と説明することを根拠に、結局 pamha は pakṣman で、単に「雄しべ」それも「蓮の雄しべ」を指し、窮極的には「蓮の雄しべのような黄色」すなわち「白っぽい黄色」を意味すると述べる。

一方、Nathmal は、padma すなわち「蓮」の色が「赤色」であることは周知の事実であり、他方 padmaleśyā は雄黄又はうこんのような「黄色」と説明される所⁴⁾ から、何故黄色の leśyā を、赤色を意味する padma で表示したのかという疑問を提起し、これに対して次の如く二様の解答を与える。

(1) 蓮は黄色ではないが、その萼は黄であり、註釈者も padmaleśyā を蓮の萼色と説明しているから、padmaleśyā の名称には、蓮の萼に因んで padma の語が用いられた⁵⁾。

(2) 一方、pamha は註釈者によつて padma と pakṣman の両語に比定されるが、前者の場合は pkt. 文法上認められない。そこで pamhalessā の pamha を pakṣman に比定しても、(1)の解答の場合と同じようにこの語は黄色に関係することになる。すなわち、pakṣman の語義の一つに kesara (雄しべ又は花粉) があり、花粉と同じ黄色の leśyā を、この名称で呼ぶ。

両者の見解を比較すれば、Charpentier 説は理路整然としているのに対し Nathmal 説は、論点(1)で pamha=padma を前提条件として容認し、それを否定した論点(2)とは全く矛盾するのに、両方の解答の可能性を示唆したままで、更にその論証も支離滅裂である。しかし、論点(2)は、論述に不十分な点はあつたとしても、論旨は、ほぼ Charpentier 説に一致する。かくして、各々独立に、この問題を検

3) V. M. Bedekar は “The Doctrine of the Colours of Souls in the Mahābhārata” (ABORI 1968) p. 332 note (2) で、Charpentier 説を支持する。

4) Nathmal は引用個所を明示していないが、これは、Utt. 34-8 (hariyālabheyasaṁkāsā hariddābheyasamappabhā/pamhalessā u vaṇṇao//) の haritāla と haridra を指すのに違はなく、この説明は padmaleśyā というよりも直接的には pamhalessā 加えられたものである。これは Nathmal が、本文中の pkt. pamhalessā と註釈中の skt. padmaleśyā を区別しないため起つた誤りであろう。

5) sthāṇaṅgasūtra sū° 221 abhayadevaṇṭṭi 「padmagarbhavarṇā leśyā pītavarṇety arthaḥ, padmaleśyā」を Nathmal は脚註に引用。本稿註 9) 参照。

偈には、上述個所と同一文脈で、paumapamhagora の代りに pamhagora が使用される⁸⁾ また、Aup. sū° 38 では、空行神ではなく Mahāvīra の高弟 Gautama の徳を述べた個所に、彼の身体の色が pamhagora の語で表現されており、この註に対し、註釈者 Abhayadeva は、Aup. sū° 26 で paumapamhagora に加えたのと同じ解釈を与えている⁹⁾。以上の事実から、pamha と paumapamha は、同義語で、pamha も、それ一語で、paumapamha と同じく padmapakṣman すなわち「蓮の雄しべ」を表わすと断定できるであろう。

以上、身体の色 pamha について考察してきたが、更に、lesyā との関連を求めると一層興味深い。Jiv. sū° 215 では空行神の色に言及した後、彼らの leśyā にも触れ、ここに現われる leśyā は身体の色と対応することが明らかになる¹⁰⁾。このように、lesyā の pamha と身体の色 paumapamha が対応し、既に身体の色に関して pamha と paumapamha が同一であるとの結論が得られた以上、lesyā の pamha も身体の色のパムハと同じく、語形上 pakṣman に比定されるが、実際には padmapakṣman「蓮の雄しべ(のような黄色)」を表わすことに疑問の余地はない。

以上の考察から、pamha=pakṣman と解する Charpentier や Nathmal の見解に対する確証を得ることになるが、同時に、先程指摘された疑問に対する解答も

8) Brhatsaṃgrahaṇī (Jaina Dharma Prasārika Sabhā, vi° saṃ° 1991) mūla 195 (Aup. sū° 26 Abhayadevavṛtti, Jiv. sū° 215 Malayagiriṭikā の引用偈は同文): kaṇagattayarattābhā, suravasabhā dosu hoṃti kappesu/ tisu hoṃti *pamhagorā*, teṇa paraṃ sukkilā devā/

9) Aup. sū° 38: kaṇagapulanigghasa *pamhagore*
同上 Abhayadevavṛtti: pamhatti—padmagarbbhas tadvad gauro yaḥ sa tathā,
Aup. sū° 26 Abhayadevavṛtti: “paumapamhagora” tti kamalagarbbhakāntā pitā ityarthāḥ.

10) 身体の色については註6) 8) を参照。lesyā については Jiv. sū° 215:
sohammīsāṇadevāṇaṃ kati lessāo paṇṇattāo, goyamā, egā teulessā paṇṇattā/
saṇaṃkumāramāhiṃdesu egā pamhalessā, evaṃ baṃbhalogevi pamhā, sesesu ekkā sukkalesā, aṇuttarovavāṭiyāṇaṃ ekkā paramasukkalesā//
Brhatsaṃgrahaṇī mūla 193 194, Jiv. sū° 215 malayagiriṭikā
joisasohammīsāṇa teulesā muṇeyavvā//
saṇaṃkumāre māhiṃde ceva baṃbbhaloe ya/
eesu pamhalessā teṇa paraṃ sukkalesā u//

尚、lesyā と身体の色の対応は、Jiv. の本文では一部分合致しない所があるが、後の作品では、完璧に対応する。

討した西洋人学者とインド人学者が、同一の結論に達するのである。

事実、pamha は pāiasaddamaḥaṇṇavo 等の pkt. 辞書や Pischel の pkt. 文法 § 312 でも明白のように、一般的には pakṣman と解され、pamhalessā の場合、例外的に padma と解されるだけだから、pamha=padma は元来不自然であり、pamhalessā の pamha も pakṣman であるとする両者の説は、十分首肯されるように思われる。しかし、Charpentier が説く pakṣman が「蓮の雄しべ」であるという説の根拠については、彼は Weber 説を引用し、註釈中の pamha=padma kesara に言及するだけであり、他方、Nathmal は、pakṣman が蓮の雄しべである必要すら認めていない。又、pamha が padma に誤解された原因について、Charpentier は何も言及しておらず、Nathmal は、pamha=padma の容認という誤った前提の下に、論点(1)のような附会を試みるだけである。両者共、満足な説明を与えていない。

しかし、經典を更に精査する時 pamha=pakṣman 説の確証が得られると共に、(A) pakṣman が蓮の雄しべであるべき必然性と (B) pamha が padma に誤解された原因が、それらの行間に求められることが判明する。

經典の中で、第1 Upāṅga の Aupapātikasūtra (以下 Aup. と略す) の sū° 26 と、第3 Upāṅga の Jivājivābhigamasūtra (以下 Jiv. と略す) の sū° 215 には、神群のうちの第四衆空行神 (Vaimānika) 達の種々の特徴が言及されているが、その一つに諸神の(身体の)色が挙げられる。そこでは一部の空行神の色が pauma-pamhagora であると言われる⁶⁾が、この語は註釈でも明らかなように⁷⁾ skt. padmapakṣmagaura であり、すなわち、Charpentier が pamha の訳語に推定した「蓮の雄しべのような黄色」に外ならない。

經典以後の bṛhatsaṃgrahaṇī と、Jiv. や Aup. の經典に対する註釈中の引用

6) Aup. sū° 26 (Publisher Pt. Bhurālāla Kālidāsa vi° sam° 1994): teṇaṃ kāleṇaṃ teṇaṃ samaeṇaṃ samaṇassa bhagavao mahāvīrassa *vemāṇīya devā* aṃtiṃ pāubhavitthā.....rattābhā *paumapamhagorā* seyā.....

Jiv. sū° 215: sohammīsāṇesu devā kerisayā vaṇṇeṇaṃ pannattā, goyamā! kaṇagattayarattābhā vaṇṇeṇaṃ paṇṇattā/ saṇaṃkumāramāhīṃdisu ṇaṃ *paumapamhagorā* vaṇṇeṇaṃ paṇṇattā/ baṃbhahoge ṇaṃ bhaṃte! goyamā! allamadhuga-vaṇṇābhā vaṇṇeṇaṃ paṇṇattā, evaṃ jāva gevejja, aṇuttarovavātiyā paramasuk-killā vaṇṇeṇaṃ paṇṇattā/

7) Jiv. sū° 215 Malayagiriṭikā: sanat-kumāramāhendrayor brahmaloke'pi ca *padma-pakṣmagaurāṇi*, *padmakesaratulyāvadātavarṇānti*/

得られるように思われる。

pamhalessā の pamha は、具体的には padmapakṣman (蓮の雄しべ) を意味するから、語形上から単に pakṣman すなわち「雄しべ」を意味するだけでなく、「蓮の雄しべ」と理解される必要がある。(上述Aの解答)

又、経典では pamha と paumapamha の両語が並存して同義に用いられ、後の作品には、専ら pamha のみが現われることから、次のように推定するのが最も妥当であろう。すなわち、pamhalessā の pamha は、元来 paumapamha なる複合詞であつたが、そのうち pauma が脱落し、pamha の一語で表わされるようになった。この時、この語に対応する skt. 語形として本来充てられるべき pakṣman の代りに、脱落した筈の複合詞の第一要素で、より一般的な語である padma を誤つて採用するに至つた。かくして、pakṣman と比定さるべき pamha が、何故 padma に誤解されたかの原因が説明されたように思われる。(上述Bの解答)

以上から、経典では「黄色」の pamhaleśyā が、誤つて padmaleśyā として認められて、TA では「赤色」を表わすようになり、耆那教の伝統自身に混乱をもたらすことになったとの結論が得られる。

— 新 刊 紹 介 —

イ ン ド 学 報

INDOLOGICAL REVIEW

No. 1

第一号 編集者小林信彦

インド学報社 昭和五十年十二月 刊

〒 607 京都市東山区山科東野門口町 52

真光寺山内

定価 2.000 円

第二号 昭和五十一年十月 刊

定価 2.000 円